

子どものいる暮らし―男・夫・父

## 共に過ごす暮らしの中で

新山 裕之

### 父親の存在とは？

このところ、親が我が子を虐待する事件をしばしば耳にする。そのたびに新聞記事に載る親の言いは、大抵「言うことを聞かなかったから」である。言うことを聞かなかったから……。三人の

子どもをもつ親として、わからなくはないという気持ちもある。けれど、やはりその親子はどこかでボタンの掛け違いをってしまったのではと、悲しい思いが心に残ってしまう。

核家族では父親は一番強い存在である。もちろん、そうでない家庭もある。しかし、父親は家庭

の中で一番わがままな子どもになってしまう可能性も持っているのではないだろうか。

そして、いつのまにか

——子どもは親の言うことを聞くものである——

——子どもが親の言うことを聞かないのは許せない——という一方的な論理が生まれてしまう。子どもは親のものではないし、親が勝者で子どもが敗者でもないはずなのに。

そんなことを思い、さて自分は子どもにとってどんな父親なのだろうか？と考えたとき、まず頭に浮かんだのが、私の父親のことであった。

### 父の思い出

昔はよく雪が降った。我が家の近所のお寺には協の斜面にお墓があって、その通路が格好の滑降

コースになっていた。雪が降ると、そこで友達とよくソリ遊びを楽しんだ。ソリは、もちろん木製。今のプラスチックのような物はなかった。そのソリを父親が作ってくれるのをワクワクしながら見ていたことを覚えている。

板で座るところができる、次に、切った竹を風呂場の焚き口の火であぶり、曲げる。父がぐつと力を込めると竹を曲げるのが魔法のように見えたものである。そして、スキーのような形になったその竹と座席を合体させるとソリのできあがりである。滑降コースの最後のジャンプ台をビューンと飛んでもびくともしない立派なソリだった。

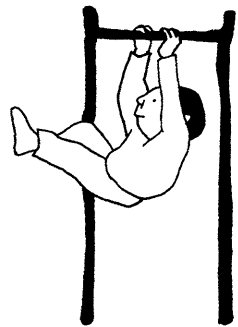
雪が降ったからソリ遊びをしよう。でもソリがないからお店で買ってこようという生活は、いかにも消費生活そのもので好きになれない。まして、こんな思い出は残らないだろう。

そんなことを思い、先日の大雪の時には、子どもと一緒に、家にある棒や板を使って雪かきスコップを作って雪かきやソリのコース作りをして汗を流した。

### 自分の手で作る喜び

田舎にある我が家の回りには、材木や薪や竹など何かを作ろうと思えば、材料はごろごろしている。高価なものや立派なものがあったわけではなく、その分、自由に使える物や環境が自然を含めて、たくさんあったのかも知れない。

父親が作っているところを見るだけでなく、小さい頃からのこぎりやなたをいたずらして使っていた。そのためか、今も家の中でなにか都合が悪いくところがあると、その辺にあるもので、工夫して作ってしまう。仕事場でも、子どもたちと一緒に遊びに使う物を作るのは楽しい。



先日、研修会の帰り道。久しぶりに、趣味の路地裏ぶらぶら歩きを楽しんだ。青山通りを表参道から赤坂見附まで。途中、素朴な字で「木の仕事」という小さなギャラリーのポスターが目にとまった。無垢材を使って家具などを作っている、かつみゆきおという家具職人の個展の案内だった。

小さい頃から身の回りには木があり、何かを作ったり、風呂焚きで毎日薪に触れていたからか、木にはなぜか親しみを感じる。吸い寄せられるようにギャラリーに入っていくた。

落ち着いた仕上がりの大きな机を手で触り、椅子に腰掛け久しぶりに木の温もりを存分に味わった。ギャラリーの女主人と、しばらく木の話をした後、木の筆箱を求めて帰ってきた。箸箱のようなデザインで、小学生の頃の木造校舎のような匂いがして懐かしい。仕上げに塗ってある塗料は何かわからないが、もらってきたかつみさんの書いた文章によると、自然を冒さない自然塗料であるらしい。使い込むうちに艶や風合いが出てくることを期待して、大事に使いたいと思っている。

帰り道、自分でも作ってみたいという思いがムクムク湧いてきた。帰宅して子どもたちにお父さんが筆箱を作ってあげようかと申し出てみるが、反応はいまひとつ。でもいい、今度の長い休みに、作る父の姿を見せたいと思う。

そういえば、今度一年生になる末息子が自分で

机を作るから牛乳パックを集めておいてくれと言っている。この申し出はともうれいものだった。必要なものは買えばいい、という発想ではなく、必要だから自分で作ろうという構えがあることがとてもうれしかった。

実はこれこそが我が家の子育て・暮らしのモットーだからである。

### 日常を共にする

一緒に物を作ることはそれだけでなく、その時間を共に過ごし空気を一緒に吸っていることに意味がある。物や環境をお金で買い与えるのではなく、日常を共に過ごすことやそこでのかかわりを通して、子育てはするものだと思っている。

特別な環境を与えたりすることはない。だから我が家には子ども部屋がない。まして、子ども用の勉強机もない。必要があれば、勉強はどこでも

できる。これはあなたのためよと、個室と勉強机を買い与え、塾に入れようとは思わない。学校や塾の勉強だけが生きる力になるとも思わないから。また、家族の一員である以上、子どもといえども、学校の勉強よりもまずは家のことが優先する。できないことは要求しないが、家の中でそれができることをして、共同生活を営んでい。風呂掃除や布団の上げ下ろしは、もうすでに完全に子どもたちの守備範囲になっている。最初は教えるのに苦労したり、子どもにやらせた後、いつも大人がやり直ししなければならぬこともたくさんあった。しかし、その手間は私が父と一緒にソリを作ったのと同じ意味をもっている。

特別なことをお金をかけてするのではなく、身の丈の日常生活の中で人や物とかわっていくことを大事にしたいと思う。その中で子どもだけでなく、親である私も妻もお互いに学び、育ってい

きたいと思う。

疲れて帰ったときには、子どもたちの騒々しさにうんざりさせられることもある。

でも、同じように疲れて帰ったとき、子どもたちの騒々しさにほっとさせられ、心が癒されることも多い。子どもたちのいる暮らしをありがたと思う。

我が家の夕方は、家族が襖も取り払ったひとつの空間の中で、それぞれが別々のことをしながら同じ空気を吸って過ごしている。お互いの気配を感じながら、それぞれが自分のことをしている我が家が好きだ。

(芝浦幼稚園)